



教育実践における教材

特集にあたって

越野和之

本誌は教育実践のありように直接関わる特集を定期的に位置づけてきた。この系譜を遡ると「教材研究と授業づくり」（第38巻4号、2011年）という特集を見出すことができるが、本特集では10年を経て再び「教材」を取り上げる。

教師のしごとの中核の一つは、なんと言っても日々の授業づくりであり、教材づくりや教材研究は、この過程において重要な位置を占める。しかし、近年の教育政策の動向を見ると「コンテンツからコンピテンシーへ」といった論調が目立ち、「教育内容／教材」の検討は後景に押しやられがちである。学校現場におけるICT活用の効能の一つに「教材研究・教材作成等の授業準備にかかる時間・労力」の「削減」をあげる中央教育審議会答申（2021）などはその典型例であろう。こうした動向の下にあって、教育実践における「教材」のあり方に関わる検討は重要な課題である。

本特集では、「モノ」としての教材だけではなく、その教材を用いて教育実践を組織しようとする教師の子ども理解、子どもの発達へのねがいが詰まった「この時間のこの教材」という視点を重視したいと考えた。とりわけ障害児教育の場合、当該教師の子ども理解や、子どもの発達へのねがいと、用意される教材との間には密接不離ともいえる関係があり、この関係を離れては、当該教材に込められた教育的なねがいの本質的な部分が失われかねないという側面があると考えたからである。他方で、この面ばかりを強調すると、優れた実践が「名人芸」とされて、そこから教訓をくみとる途が閉ざされかねない。こうした緊張関係を

とらえ、論じられることを期して「教育実践における教材」という特集タイトルを付した。

冒頭の2本の論文は総論の位置にあたる。川地は教師の仕事と教材に関わる近年の教育政策の動向を批判的に概観した上で、障害児教育における教材論の更新に関わる問題提起を行っている。越野は「権利としての障害児教育論」の成立と発展の中で更新されてきた教育観、授業観を踏まえつつ、障害児教育実践を伸びやかに発展させる課題との関わりで「教材論」の論点を提示する。

続く2本の論文は具体的な実践に即して教材論の広がりを示すものである。赤木は「即興的表現活動」を取り上げ、その教育実践としての可能性と意義を論じ、渡邊は七生養護学校における「こことからだの学習」における教材・教具に注目して、その教育的な妥当性を論証するとともに、教育行政による介入の不当性を改めて明らかにしている。

実践現場からは、小学校特別支援学級における絵本を用いた授業（猪澤）、障害の重い子どもの授業づくり（若山）、病弱教育（院内学級）における教材の工夫（橘岡・佐藤）の3本の報告を寄せていただいた。いずれも、それぞれの現場の子どもたちの姿に即して「生きることを励ます文化を手渡す」実践のありようを伝えてくれる貴重な実践記録である。

本特集が様々な教育現場で広く読まれ、「教育実践における教材」の旺盛な研究と交流に資することを願ってやまない。

（この かずゆき）